潮音寺だより

第 269 号
平成 18 年 3 月

電 話 052-671-4831
ファックス 052-671-4856
E-Mail:choonji@aichi.email.ne.jp
〈ホームページ〉http://www.ne.jp/asahi/choonji/namo/
〒456-0034 名古屋市熱田区伝馬 1 -10-11

写真:「カタクリ」 足助にて;正道

横車を押すような
理不尽な行為は
許されません

でも
生老病死
苦しみの大河を
ひょいと
跳び越えて

彼岸の弥陀界に
入りたいと願うのは
不合理なことでは
ありません

それは
弥陀の
本願に叶う
ことだからです

最期の一言（日本編）

人にはそれぞれの個性がありますから、その死に方もまたそれぞれであります。何時か迎えねばならないその日のために、先人達の死に様を知っておくのは、無駄なことではないと思われます。

◆**一休**（1394～1481）

室町時代の臨済宗の僧。当時の禅宗界をしんらつに風刺して、人間的な禅風を目指した。文明13年11月、寒さや高熱がおそう「ぎやく」にかかり、21日朝に没した。死ぬにあたって彼は「死にとうない」といって、座ったまま眠るように死んだという。87歳。

◆**良寛**（1758～1831）

江戸後期の曹洞宗の僧。諸国行脚の後、郷里越後に住んだ。文政13年7月、激しい下痢を患う。症状は夏から秋にかけ一進一退した。そのときの反古のなかに「ぬばたまの、よるはすがらに、糞まりあかし、あからひく、昼は厠に、走り敢へなくに」の歌がある。大晦日、介抱していた貞心尼は「生き死にの境離れて住む身にも、通らぬ別れのあるぞかなしき」と口ずさむと、良寛は「裏を見せ表を見せて散るもみじ」とつぶやいた。明けて1月6日夕、眠るが如く去った。73歳。

◆**葛飾北斎**（1760～1849）

江戸時代後期の浮世絵師。生涯に93回引越しをし、酒も煙草もまずただひたすら描き続けた。嘉永2年4月風邪をひき、枕頭には娘や弟子たちが集まった。ここで彼は「人魂ゆく気散じや夏の原」と辞世をよみ、「あと10年生きたいが、せめてあと5年の命があったら、本当の絵師になられるのだが」とつぶやいて息を引き取った。89歳であった。

◆**二宮尊徳**（1787～1856）

江戸後期の農政家。通称金次郎。安政3年10月20日、今市の居宅で多くの崇拝者に囲まれ、「葬るに分を越ゆるなかれ、墓や碑を立てるなかれ、ただ土を盛り、そのわきに松か杉一本を植えれば足る」といって息を引き取った。69歳。

◆**樋口一葉**（1872～1896）

明治中期の小説家。「たけくらべ」「にごりえ」を発表。明治29年11月3日、教師の馬場が一葉を見舞い「冬休みにまた上京しますから、そのときまた参りましょう」といった、すると一葉は苦しそうな声で「その時分には、私は何になっ

ていましょう、石にでもなっていましょうか」と切れ切れに言った。それから20日後、彼女は死んだ。24歳であった。

◆**岸田劉生**（1891～1929）

大正時代の洋画家。娘をモデルとした「麗子像」は有名。昭和4年12月14日夜、劉生は徳山の料亭で銀屏風に舞子を描いた。そのあと筆を持ったまま脇息にもたれ「気持が悪い」といった。発病後2日して、医師から慢性腎臓炎による視力障害と診断された。18日、彼は「暗い」「目が見えない」と叫び、以後頻に「バカヤロー」を繰り返した。12月20日。吐血して死亡。38歳。

◆**北原白秋**（1885～1942）

詩人、歌人。詩集『邪宗門』がある。白秋は昭和12年、糖尿病と腎臓病による眼底出血で、原稿が読めなくなる。昭和16年の末、歩行困難、呼吸困難になり、翌年2月入院。4月より自宅療養することとなる。11月2日の午後4時頃、白秋は「なに、負けるものか、負けないぞ」とうめいた。長男が窓を開くと「ああ蘇った。隆太郎、今日は何日か。11月2日か。新生だ、新生だ。この日をお前達よく覚えておき。私の輝かしい記念日だ。新しい出発だ。窓をもう少しお開け。ああ、素晴らしい」。しかし最期の発作では「一度安心したせいか、もう打ち勝つ気力もない。駄目だ、駄目だよ」とあえぐようにつぶやいた。57歳。

◆**大宅壮一**（1900～1970）

政治・社会時評家。昭和45年10月26日、山中湖の山荘で息苦しさを訴え、急遽帰京して入院。11月18日、昏睡状態から覚めた彼は「ああ、腹が減った。何か食うものをよこせ」とどなった。11月22日午前3時4分、一度心臓が停止したが、3時43分に永遠に止まった。死ぬ直前に妻に「おい、だっこ」といったという。70歳。

◆**徳川夢声**（1894～1971）

話術家。昭和46年7月22日、腎盂炎で入院。7月末、彼は妻に爪を切ってもらうと、その手を目の先にもっていってじっと眺めた。妻は病人が自分の手を見詰めるようになると、まもなく死ぬという話を思い出して「疲れますよ」といってその手を下ろした。3日後の8月1日午後零時20分、妻に「おい、いい夫婦だったなあ」といって死亡。77歳。

◎春彼岸施餓鬼会

「春は名のみの風の寒さや」の『早春賦』の歌が覚えず口ずさみたくなるようなこの頃、今年は、ことさら春が待ち遠しく感じられます。工事中ではありますが、例年どおりに施餓鬼会が勤まります。皆さまお揃いで、お参り下さいますよう、ご案内申し上げます。

・期日　三月二十一日（火）
・時間　一時半～二時半位

◎位牌堂

二月十日、檀信徒総代の方々ご臨席の下、晴天にも恵まれ、無事に上棟式を厳修させて頂くことができました。二月十七日より、外壁の工事が始まりました。

雑記

▼ネコ

本誌で以前紹介した子ネコが、突然いなくなってしまいました。とてもよく馴れていて、しかもなかなかの器量よしであっただけに、とても残念であります。

同じ兄妹の二匹は、今も同じ小屋で寝泊まりしていて、餌をあげているのですが、いまだ心を開いてはくれず、体に触れさせてはくれません。どこへ行ったんでしょう。誰かが可愛がっていてくれればいいのですが……。

▼カタクリの花

愛知県の足助町というと、紅葉の名所として有名ですが、「カタクリ」が群生するということでも有名です。その花は、まさにスプリング・エフェメラル（早春の妖精）と呼ばれるにふさわしい可憐さがありますね。

▼仰ぎ見る扇車や
浅き春　沐魚